

第25回

鷹山公シンポジウム

YOZAN
SYMPOSIUM

第1部 講演

〈明君〉の時代

— 現在(いま)に語りかける鷹山公の政治理念 —

講師 千葉大学教育学部准教授

小関 悠一郎氏

郷土出身(南陽市・梨郷育ち、興讓館高校卒)、新進気鋭の歴史学研究者が新しい視点で鷹山公の藩政改革に光を当てます!

「鷹山公シンポジウム」もおかげ様で25回を迎えました。

その中で、鷹山公の藩政改革については何度もテーマに取り上げ、昨年は、藩政改革当初の中心者であった竹俣当綱の改革のねらいから、改革の必要性や時代的な背景などを考えてみました。今年も、昨年の討論の中でも紹介されました昭和52年生まれ、若き郷土出身の歴史学研究者、千葉大学の小関先生の登場です。

鷹山公や竹俣当綱はどういう学問や知識で改革に取り組み、改革の結果、鷹山公はどう明君として歴史に位置付けられていくのか、先生によってそれらが新しい視点で明らかにされていきます。大いに期待したいところです。

今年度中には、先生のご著書『〈人があるく〉上杉鷹山と米沢』(吉川弘文館)が刊行されます。米沢市民への大きなプレゼントであり、今回はそのお披露目ともいえるお話となります。

第2部 講師と語る

休憩後、先生のご講演への理解をさらに深めるために、ステージで先生と語り合う場を設けます。また会場の皆さんからご質問、ご意見、ご感想などをいただきます。

語り合う方は青木昭博さん(市立米沢図書館郷土資料担当)です。専門家同士ならではの語り合いが楽しみです。

期 日 平成27年 8月 30日(日)

午後1:00 開場 / 午後1:30 開会
午後4:35 閉会 (途中休憩あり)

- 第1部 午後2:00～3:30 (90分)
- 第2部 午後3:40～4:30 (50分)

会 場

伝国の杜
置賜文化ホール

※整理券がありませんのでお早めにおいでください。

入場無料

主 催：上杉鷹山公と郷土の先人を顕彰する会
共 催：米沢四季のまつり委員会・米沢市教育委員会
後 援：米沢市芸術文化協会・米沢市歴史団体連絡協議会

お問い合わせ

090-2020-7976(後藤)
090-2027-4572(高橋)

■ 講師 千葉大学教育学部准教授 **小関 悠一郎氏****講演の要旨**

今日的な企業家精神と民主的で柔軟な思想とを持ち合わせ、断固たるリーダーシップを発揮した歴史人物。1990年代以降、日本の政治・社会の進みゆきが不透明さを増す中で、このような上杉鷹山像が全国的に広く知られるようになりました。

戦後長く、十分な光を当てられてこなかった鷹山公が、突如歴史の表舞台に登場したかのようにも見えますが、そうではありません。実は、鷹山公が高く評価され、その名が広く知られるという現象は、すでに江戸時代に始まっていたのです。

ではなぜ、時代をこえて多くの人が、江戸時代の一大名に過ぎないとも言える鷹山公に関心を寄せ続けるのでしょうか？この問いを解くカギは、「明君（名君）」として共感を呼んだ鷹山公の政治と思想が、近世日本（江戸時代）の政治文化を体現すると同時に、次代につながる発想を持っていたことにあります。今回のシンポジウムでは、鷹山明君像の展開、改革を支えた学問・知識を焦点に、これまで知られてこなかった藩政改革の一面に光を当ててみたいと思います。

経歴

1977年（昭和52年）宮城県仙台市生まれ。

11歳から高校時代まで南陽市・梨郷で過ごす。

米沢興譲館高校（96年3月卒）から一橋大学社会学部に進学。

一橋大学大学院社会学研究科修士課程・博士後期課程修了。

日本学術振興会特別研究員 PD（東北大学）などを経て、現在、千葉大学教育学部准教授。

研究分野

専門は日本近世史。大学院時から、自分が育ったふるさとの米沢藩家老竹俣当綱の思想や上杉鷹山の言行を描いた明君録の研究を焦点に、学問・知識と政治という観点から近世という時代を読み解く研究を行っている。

著書

『明君』の近世—学問・知識と藩政改革』（吉川弘文館、2012年）

『藩地域の政策主体と藩政—信濃国松代藩地域の研究②』（岩田書院、2008年、共編著）

『よみがえる江戸時代の村田—山田家文書からのメッセージ』（東北アジア研究センター、2014年、共編著）

『人をおく』上杉鷹山と米沢』（吉川弘文館、近刊）